

新垣宏一と本島人の台南

——台湾の二世として台南で文学と向き合う

大 東 和 重

はじめに——日本統治期台南文学の最終走者

新垣宏一（一九一三－二〇〇二年）は、高雄で生まれ、戦前は台南・台北で、戦後は徳島で教員をしながら、創作や文学研究に従事した文学者である¹⁾。

徳島を本籍とし、高雄に生を受けた新垣は、高雄第一小学校、高雄中学校に学んだ。小学時代より作文を得意とし、中学ではガリ版刷りの同人誌を作り、地元南部の『台南新報』に詩を投稿するなど、早くから文学を愛好した。一九三一年台北高等学校に入学、黄得時を知り、三四年台北帝国大学文政学部文学科に入学、国文学を専攻するとともに、英文学者の矢野峰人・工藤好美、比較文学者の島田謹二らの指導を受けた。在学中から『台湾文芸』や『台湾新文学』に詩や評論を発表、また『台大文学』を創刊するなどの活動を行った。

一九三七年大学を卒業、七月に台南州立第二高等女学校の国語科教諭として赴任した。約四年間在職し、四一年四月、台北州立第一高等女学校へ転任した。新垣が最も多産だったのは、この一九三七年から四五年にかけて、台南と台北で教員生活を送っていた時代で、主に台南を舞台とした詩や随筆、考証、小説

1) 新垣の自伝としては、『華麗島歲月』（前衛出版社、二〇〇二年）を、年譜・著作目録としては、戴嘉玲編「新垣宏一先生年譜初稿」（『華麗島歲月』前掲）を参照した。伝記的資料としては、中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』（緑蔭書房、二〇〇五年）を参照した。

を数多く書いた。戦後しばらく台北で留用生活を送るも、一九四七年五月帰国、徳島県立穴吹高等学校校長などを歴任し、七六年からは徳島大学や四国女子大学でも教鞭を執った。

筆者はこれまで、日本統治期の台南における日本語文学について研究を進めてきた²⁾。台南を舞台に、影響力ある日本語の小説を最初に描いた作家は佐藤春夫で、「女誠扇綺譚」（『女性』一九二五年五月）はその後の台南在住の日本人による台南文学の方向を決定づけた。台南に住んで歴史の研究に従事した前嶋信次は、「女誠扇綺譚」の影響を受けつつ台南を表象し、また考古民族学者國分直一にもその影響の痕跡はうかがえる。台南を訪れて「赤嵌記」（『文芸台湾』第一卷第六号、一九四〇年十二月）を書いた台北在住の作家西川満も、強い影響を受けた一人である。一方、「女誠扇綺譚」と異なる角度から台南を描いた作家に庄司総一がおり、台南の旧家を舞台とする『陳夫人』（第一部一九四〇年、四二年第二部、通文閣）は、台湾人も含む広い範囲の台湾の作家たちに、「女誠扇綺譚」とは異なる衝撃を与えた。日本統治期の台南文学において、最後に登場する新垣宏一は、これら先行者たちから影響を受けつつも、台南居住を契機に独自の道を模索し、一九四〇年代前半に台南を舞台とする小説を書いた。

新垣宏一についての先行研究は少なく、本格的なものとしては、和泉司氏の論文がある程度である³⁾。本論文は、日本統治期の台南を舞台とした日本人に

2) 関連する拙稿に、「前嶋信次の台南行脚——一九三〇年代の台南における歴史散歩」（『近畿大学語学教育部紀要』第七卷第二号、二〇〇七年十二月）、「旅居台南時期的國分直一——発現具有多元文化的台湾」（戴文鋒主編『南瀛歴史、社会与文化Ⅱ』台南県政府、二〇一〇年四月）、「庄司総一『陳夫人』に至る道——『三田文学』発表の諸作から日中戦争下の文学へ」（『日本文学における台湾』台湾中央研究院人文社会科学研究中心亚太区域研究專題中心、二〇一一年十月）、「植民地の地方都市で、読書し、文学を語り、郷土を描く——日本統治下台南の塩分地帯における呉新榮の文学」（『日本文学』第六十一卷第十一号、二〇一二年十一月）、「古都で芸術の風車を廻す——日本統治下の台南における楊熾昌と李張瑞の文学活動」（『中国学志』第二十八号、二〇一四年三月）がある。

3) 和泉司「新垣宏一「砂塵」論「異文化を見る」という視点」（『三田国文』第三十八号、二〇〇三年十二月。同『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉〈文学懸賞〉がつ

よる日本語文学の、最終走者といえる新垣宏一の創作活動について概観し、さらに新垣が台南の人々をどのように描いたのかについて、輪郭を描くことを目的とする。

一 「湾生」の文学青年——『台南新報』投稿から台北帝大まで

新垣宏一の戦前の文学活動は、居住地により三期に分けられる。一九三一年から三七年までの、台北高校・台北帝大在学時代。三七年から、台南州立第二高等女学校に国語科の教諭として奉職した、台南時代。そして四一年から、台北州立第二高等女学校に奉職した、二度目の台北時代である。

早くから文学に目覚めた新垣が、本格的に文学活動を開始するのは、一九三四年台北帝大に入学してからである。国文科に属した新垣は、日本近代文学を専攻しようと考えていたが、結局卒論の対象は近世文学、中でも西鶴を選んだ（『華麗島歲月』⁴⁾）。しかし新垣が愛好したのは、日本近代文学、中でも夏目漱石や芥川龍之介、佐藤春夫で、国文では近代の文学を扱わなかったため、英文科の教員に親炙した。当時台北帝大には、英文学者の矢野峰人（一八九三—一九八八年）、工藤好美（一八九八—一九九二年）、比較文学者の島田謹二（一九〇一—一九三年）ら、気鋭の学者陣がそろっていた。中でも島田は、同時代作家の文学、森鷗外・上田敏・永井荷風・北原白秋・芥川・佐藤らについて、比較文学の見地からしばしば論じた。新垣は、同じく文科生の黄得時（一九〇九—一九九年）や、戦後天理大学教授となった中村忠行（一九一五—一九三年）らとともに、島田に親しく接した。

くる〈日本語文学〉』（ひつじ書房、二〇一二年所収）、林慧君「新垣宏一小説中的台湾人形象」（『台湾文学学報』第十六期、二〇一〇年六月）。他に、部分的に新垣に論及した研究に、奥出健「『文芸台湾』の成立と三人の日本人作家」（『湘南短期大学紀要』第八号、一九九七年）、井手勇「戦時下の在台日本人作家と『皇民文学』」（台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在』緑蔭書房、一九九九年）などがある。

4) 新垣『華麗島歲月』（前掲、三四頁）。

最初の詩「葬式のあつたらしい夜」が発表された雑誌『第一線』（第二号、一九三五年一月六日）は、一九三三年成立の「台湾文芸協会」の機関誌で、執筆者の多くは台湾人だった。掲載に際しては、幹事をしていた黄得時の紹介があったのかもしれない。初期の詩「切支丹詩集」「玫瑰珠」「さんた・くるず墓地」「南蛮絵屏風」は、タイトルからも推察されるように、北原白秋（一八八五—一九四二年）の『邪宗門』（易風社、一九〇九年）や芥川龍之介（一八九二—一九二七年）の「奉教人の死」（『三田文学』一九一八年九月）をはじめとする、明治末から大正半ばにかけての切支丹ものの影響が色濃い。

詩を発表したのと同じ一九三五年、新垣は『台湾文芸』に小説「訣別」を発表した（第二巻第六／七号、一九三五年六月十日／七月一日）。『台湾文芸』は一九三四年に結成された「台湾文芸聯盟」の機関誌で、三〇年代半ば、ようやく成立しかけた台湾文壇の中心的な雑誌である。『台湾文芸』も台湾人作家中心の雑誌で、こちらも黄得時の紹介があったのかもしれない。台北北郊の北投温泉を舞台に、大学生の演劇活動を恋愛と絡めつつ、ブルジョア家庭も交えて、唯美主義的な筆致で描いたこの作品は、未完と終ったが、『台湾文芸』では異彩を放つ作風である。このように、詩にせよ小説にせよ、新垣の初期の文学活動は、台湾人作家を中心とする文芸雑誌に、内地人の文学青年としては比較的早くから関わっている。

その一方で新垣は、台北帝大文政学部生による文学団体「台大短歌会」が、一九三六年一月、『台大文学』を創刊した際に、最高学年生として中心的な役割を果たした。ただし『台大文学』は、学生の編集する雑誌でありながら、彼らの創作を掲載する同人誌というよりは、台北帝大の文学関係の教員、島田謹二らが深く関わっていたことから、記事の多くもこれら教員の学術的なエッセイで占められた。新垣は、台北帝大の日本人を中心とするアカデミズムから生まれつつあった文学にも、深く関わっていた。

新垣が文学活動の出発期において、台湾人と日本人主催の、いずれの文壇にも関わっていたのはなぜだろうか。西川満や濱田隼雄らと異なり、新垣は台湾で生まれ育った、いわゆる「湾生」の文学青年である。一八九五年の領台以来、

日本人の増加、教育制度の充実の結果として、内地を知らない日本人子弟が育ちつつあった。台北高校の設立は一九二二年だが、卒業後は内地の大学へ進学するケースが多く、また二八年に台北帝大が設立されたものの、こちらは内地からの進学者が多かった。そんな中で、新垣は数少ない、台湾で生まれ、台湾で高等教育を受けた文学青年だった。それが、新垣が台湾人の文壇にも関わった理由の一つになっていると思われる。

ただし、当時の新垣に、台湾の文学活動に対する深い理解があったわけではない。台湾では最高の学歴を持ち、一流の教員たちの薫陶を受けつつ文学活動をしているという気負いや、また二十代半ばという若さもあっだろう、新垣は台湾人の出している雑誌のクオリティに対し、かなり辛辣である。『台湾文芸』に対抗して出された『台湾新文学』創刊号（一九三五年十二月）のアンケート「反省と志向」では、二十三名の回答者のうち日本人はわずか二人、そのうち一人が新垣だが、「台湾文学も早く落ちついて貰いたいものだと思います。何かと最近は元気が出たやうですけれど質的にいゝものが出てゐません」と、むき出しの批判的な態度を示し、「新文学三月号評」（『台湾新文学』一九三六年五月）ではいっそう高飛車に批判を展開している。

このような態度の背景には、新垣のプロレタリア文学嫌いがあると思われる。切支丹文学趣味からも分かるように、新垣の文学における好みは、高踏的なものに偏していた。後の回想では、自然主義の文学を嫌っていたため、プロ文を「単なる自然主義的なリアリズムの一派と見なして、それから離れたロマンチックないわば、センチメンタルな詩集を読み、自分の作品を書き、自己満足に落ち入っていた」とする（『華麗島歲月』⁵⁾）。一九二〇年代の内地の文壇における最大の流行は、プロレタリア文学である。左翼思想が旧制高校を風靡し、当時の多くの文学青年はプロ文に対し強い共感を示した。だが三〇年代に入ると、政府の左翼運動に対する弾圧などもあって、プロ文は冬の時代を迎える。新垣の世代にとって、すでにプロ文は必ずしも流行のイズムではなくなっていた。また、世代のずれのみならず、左翼思想が内地以上に警戒された、植

5) 新垣『華麗島歲月』（前掲、一七頁）。

民地の環境も作用していると思われる。台高時代、寮の押入れから、『文芸戦線』『戦旗』『文学評論』などが出てきたとき、官憲を恐れた新垣は、「左翼になじめない私一個人の判断」で、中庭で何日もかけ焼却したという（『華麗島歲月』⁶⁾）。

しかも新垣には、台湾の作家たちがプロレタリア文学に託した願望や理想に対する理解もなかった。台湾の文学者にとって、プロ文は単なる流行現象ではない。一九二〇年代に盛り上がりを見せた台湾人による政治運動において、民族解放の理念を代表する思想の一つが、マルクス主義だった。台湾の文学者にとっては、文学以前に、植民地支配への抵抗こそが最大の目的であり、日本の文壇ではプロ文の作家のみが、植民地台湾の作家たちに連帯を呼びかけていた。実際、新垣の批評に対し、民族主義を内に秘める台南の呉新榮（一九〇七—一九六七年）は強く反発、新垣の文学論（不詳）に対する反論、「象牙塔之鬼 主駁新垣氏」（一九三五年九月十三日作、『台湾新聞』一九三五年に掲載。原文は参照できず、張良澤による中訳を使用）を書いて、新垣の、「文学は大衆のものだというのは荒唐無稽な話で、実際には文学は少数者の占有物だ」、「芸術のための芸術」といった論点に反論した⁷⁾。

同じく台湾で文学を志しても、ことにすれ違いが生じるのは、台湾をいかに描くか、という点においてである。台北で学生生活を送っていたころの新垣は、台湾人作家たちのこだわる「郷土色」の内実に対し、違和感を抱いていた。「反省と志向」では次のように記す。

台湾ではどんな文学が、つくられなければならないかといふことについて少し感じてゐますが、よく、「郷土色を出せ！」と言つてゐる方があるやうですね。わたしは、何が郷土色か？をよく考へてほしいと思ひます。創作の価値はその人のウデマへにあること——が第一ですね、ローカルカラーもウデマへがなければその作品

6) 新垣『華麗島歲月』（前掲、二六頁）。

7) 『呉新榮選集 1』（黄勁連総編輯、台南県：台南県文化局、一九九七年）。拙稿「植民地の地方都市で、読書し、文学を語り、郷土を描く」（前掲）を参照。

を美しいものにはさせません。たゞ台湾にゐる——といふハンデキヤツプだけを利用して、自分の創作的なウデマへの鍛練をせず、ローカルカラーばかりを売りものにするのは、ちよつとずるいみたいです。逆に云へば、内地の文壇をまねて、台湾らしくない妙な心境小説を作ると云つて冷笑する人がゐますが、内地の文壇と同じ種類の世界を描いてゆくのはつまりウデマへの修業であることを気付かずにゐるのでせう。しかし郷土色をとり上げることはやはり何と言つてもよいことです。しかし、台湾の郷土色は、田舎の廟や、竹林や、豚、水牛、だけにあるものでせうか？台北の街の、三線道路や阿呆塔や、アスファルトにもあることを忘れてはならないと思ひます。〔傍線引用者、以下同じ〕

同じく台湾に暮らしていても、台湾人作家と日本人作家では、直面する現実が異なる。民族や言語の違いが大きく作用するため、両者の描く角度や対象が異なるのはもちろん、支配と被支配の関係が作用し、何をもって台湾の現実、台湾の問題とするかが、テーマや素材をはじめとする内容面で大きく異なってくる。台湾人の作家にとって「郷土」は、自らの存在意義を賭けた描写の対象だった。一方日本人作家にとっては、内地人の目に極めてエキゾチックに映る「郷土色」は、中央の文壇と異なる特色を出す上で、素材としやすかった。異なる理由で採用されていた「郷土色」は、しかし新垣には、単に売り物として台湾という「ローカルカラー」を利用している、あざとい、と見えたようである。

台北の特権的な学生や芸術愛好家の生活を描いた「訣別」は、新垣の意図を実現しようとした作品だったが、中途半端に終わった。ただしその作風は、同じく台湾を舞台としつつも、台湾人作家、あるいは台湾を積極的に描こうとする、内地出身もしくは内地で教育を受けた、西川満らの作家とも異なり、いかにも台湾らしい要素を消去し、台北の近代的都会としての側面を描こうとしている。これは、新垣が台湾で生まれ育った「湾生」だったことと関わっていると思われる。新垣にとって台湾は、内地から植民地へと機会を求めてやって来た日本人のように、仮寓の地ではない。しかし一方で、台湾人のように、台湾

は日本の一地方などではない、先祖代々住んできた自らの土地である、との意識を共有してもしなかったと思われる。

新垣が生まれ育った高雄は、主に日本人が開発した、新開の港町である。高雄市の人口は、新垣が高雄中学で学んでいた一九二六年で、約四万七千人。うち内地人が約一万一千人余に対し、本島人は約三万五千人、つまり内地人が四分の一を占めた⁸⁾。一九三八年でも、全体で約十一万人、うち内地人が約二万六千人に対し、本島人は八万二千人、つまり内地人が二十三・八パーセントであった⁹⁾。この比率は、台湾全体だと一九三八年の段階で、内地人がわずかに五・四パーセントしかいなかったのと比べれば、いかに高いか分かるだろう。これ以上高いのは台北市のみで、後述するが台南では、一九三八年の内地人の割合は十三・六パーセントにすぎない。

中でも新垣の育った湊町は「純日本的町」で、「私どもの近くには台湾人が少なく、出遭うのは台湾の荷揚げ人足、町内にやって来る清掃夫、そして人力車（トウチャー）ひきなどの、いわゆる苦力（クリ）と呼ばれた下層者たちで、その子供たち（ギナア）と遊ぶことはまずありません。旗後や塩埕町に行って、そのギナアたちとカタコトの言葉で交わることがあるくらい」だった。中学では公学校出身の優秀な本島人生徒に会い、「公学校が決して小学校に劣っていないどころか、むしろ優れた人材を生んでいる」ことを知るものの（『華麗島歳月』¹⁰⁾）、台北に移ってから学んだ、台北高校や台北帝大は、日本人の割合の高い学校であり、中でも文科はそうだった。つまり新垣は、台湾にあっても台湾人と接触の少ない生活を送っていた。

台湾人作家の文学活動は、呉新榮に典型的なように、「文学」以前に「台湾」文化の発揚という目的がある。文学は民族運動と密接な関係にあり、純粋に文学的に高い到達点を目指すものではない。しかし湾生ではあっても新垣には、

8) 高雄市役所編『高雄市勢要覧』（高雄市役所、一九二九年）に拠る。ただし『中国方志叢書』（成文出版社、一九八五年）の影印本を用いた。

9) 高雄州役所編『高雄州要覧』（高雄州、一九三九年）に拠る。ただし『中国方志叢書』（成文出版社、一九八五年）の影印本を用いた。

10) 新垣『華麗島歳月』（前掲、三・六／一四頁）。

そういった台湾人の立場は理解できていなかった。新垣が少年時代を過ごした一九二〇年代の台湾では、台湾人の地位向上のための政治運動や社会運動が盛り上がりを見せていたが、「私達内地人少年には何も聞かされてい」なかったのである（『華麗島歲月』¹¹⁾）。

しかしその一方で、新垣にとって台湾の生活があくまで日常だったことも事実である。内地から来た、あるいは内地出身の作家が、台湾を往々にして眩いばかりのエキゾチシズムで飾り立てることに抵抗があった。台湾には規模としては小さいながらも内地人の生活圏があり、台湾の風物に圍繞されつつ独自の空間を作っていた。『訣別』で描こうとしたのは、細工物のごとくデフォルメされてはいるが、それはそれで確かに存在していた、内地人の世界である。『訣別』は、台湾人作家と日本人作家が、異なる理由からであっても、ことさらに台湾らしさを演出しつつ作り上げる空間に対する、違和感から出発している。「反省と志向」における「郷土色」批判は、台湾人作家のみならず、台湾を都合のいい小道具として配置することで台湾色を出そうとする日本人作家にも向けられている。

帝大の内地人中心のアカデミックな空気に触れつつも、台湾人作家を中心とする文学運動に関わる。あるいは、東京の中央文壇の文学に惹きつけられつつも、日本の一地方としての台湾に根差した文学をも求める。あるいは、台湾の生活を日常としながら、その視野に植民地の現実という側面は入っていない。「郷土」台湾に強い愛着を抱く台湾人作家とも、日本を本来の「郷土」と考える日本人作家とも、異なる意識を持つ。新垣の初期の文学は、台湾を郷土としてつつ育った日本人が、新しい社会集団として登場する、一九三〇年代の台湾の文学環境の、一つの典型となっている。

しかし、そんな新垣に、転機が訪れる。大学を卒業した新垣は、一九三七年から、台南で教職に就く。台南は台湾の古都で、それまで新垣の住んだ新開の高雄や台北と異なり、台湾人が圧倒的多数の街である。しかもその奉職先は、台南第二高等女学校という、台湾人子女が主に学ぶ学校だった。

11) 新垣『華麗島歲月』（前掲、一五頁）。

二 本島人の台南——「女誠扇綺譚」から「第二世の文学」へ

高雄出身の新垣にとって、同じく南部の台南は、さほど遠い街ではない。しかし、新開の港湾都市高雄と異なり、古都台南は長く台湾の政治経済文化の中心であった。また台北と異なり、官吏など公用で住む日本人も少なく、住民の圧倒的多数は依然として台湾人だった。台南市の人口は、一九三八年末で約十二万四千人、そのうち内地人が約一万七千人に対し、本島人は約十万四千人であった¹²⁾。内地人の占める割合は、十四パーセントに満たない。また、台南市は台南州に属し、台湾最大の嘉南平原、農業地帯の中心に位置する。内地人も居住する台南城内は、圧倒的に台湾人社会である城外の農村地帯から、囲まれるようにして存在していた。台南市をとりまく諸郡や嘉義市を含む、台南州全体では、人口約百四十六万人、そのうち内地人は約四万八千人に対し、本島人は約百四十万人¹³⁾。内地人はわずか約三パーセントにすぎない。

台南においても、日本人は台湾語を使えずとも、買い物程度の用を足せる単語さえ身につけていれば、問題なく過ごすことできた。しかし、圧倒的多数を台湾人が占める台南は、やはり高雄・台北とは異なる環境で、いくら日本人居住区域に住んでいても、すぐ隣には領台前と変わらぬ台湾人の生活が脈々と息づいていた。しかも、新垣が一九三七年から勤めた台南第二高等女学校は、主に台湾人子女が通う学校である。同校の一九三八年末における生徒数は四九九名、そのうち内地人が一三四名に対し、本島人が三六四名で、「本島人の社会」に、生徒たち、また台南研究を通して、接し、入りこむこととなった。その結果、新垣の台湾観及び文学観に変化がもたらされる。

日本語と日本文学の世界に生きてきた新垣にとって、台南とは何よりもま

12) 台南州役所編『台南州要覧』（台南州、一九三九年）。ただし『中国方志叢書』（前掲）の影印本を用いた。

13) 『台南州要覧』（前掲、一九三九年）。ただし『中国方志叢書』（前掲）の影印本を用いた。

ず、佐藤春夫「女誠扇綺譚」（以下「綺譚」と略称）の舞台だった。新垣の最初の台南研究の成果は、台南に来て一年後、一九三八年九月から『台湾日報』に連載した、「台湾文学艸録」一八／十七－二十（『台湾日報』一九三八年九月十六－二十九日／十一月一－十六日）である。その十九、「佐藤春夫のこと四、「女誠扇綺譚」」には、次のように記されている。

此の「女誠扇綺譚」は美しい物語である。（中略）安平や台南を未だ見ぬ人は此の「女誠扇綺譚」を読んで、どんなに此の土地をなつかしむことであらうか。春夫はロマンチストであるが、センチメンタリストではない。そこが私達に喜ばれるものの一つである。事実、私は台南に来る時、先づ頭に描いたのは春夫の「女誠扇綺譚」であつた。私が初めて会つた台南の人々といふのは、生徒達であつたが、私は教場で「女誠扇綺譚」の街に来た喜びを語つた位であつた。

さうして、安平に遊び、台南の港町方面を其て歩いてみて、私の書き度いと思ふことは、すでに春夫が皆書いてしまつたと慨嘆せずにはゐられなかつた。

小説「砂塵」（『文芸台湾』終刊号、一九四四年一月一日）にも、教壇から台湾人の女生徒たちに向かつて「女誠扇綺譚」を語る、新垣自身をモデルとした教師が登場する。新垣は「綺譚」についてくり返し教室で語つたものと思われる。前嶋信次や國分直一がそうだったように、台南に住む日本人の文学愛好者にとって、「綺譚」は彼らの住む街に、ロマンチックな魔法をかける傑作だった。「綺譚」に酔わされた眼で台南を見ると、街も人も、白日夢のごとくあでやかに変身するのである。

新垣は、二年後の一九四〇年発表の「『女誠扇綺譚』断想ひとつふたつ」（『文芸台湾』第一巻第四号、一九四〇年七月十日）でも、「この数年台南に住んでゐる関係からこの地方を舞台として『女誠扇綺譚』には限りない興味をもち、この作に現れた風物について、いろいろと調査をしたり、無用の詮議を試みたりした」、「そんな風な日を送りながら春夫の作を読むことは私自身としてはまことに幸福なことであつた」と記している。また座談会「台南地方文学座

談会」(河野慶彦・大河原光広・日野原康史と、『文芸台湾』第五卷第五号、一九四三年三月一日)でも、「台南と云へば、先づ思ひ出すのは佐藤春夫の「女誠扇綺譚」、「これはたしかに傑作」で、「私も台南に来た頭初は、現実の女誠扇綺譚の街を探して、この小説のもつてゐる雰囲気を感じようとしたり、銃楼の家などについて二三考証的なものを書いたりし」と語る。持ち前の考証癖を、「綺譚」がいたく刺激したのみならず、「綺譚」が翼を広げて台南の街をおおい、新垣にとっての台南の現実を創り出していたわけである。

新垣の一連の「女誠扇綺譚」考証は、そのスタイルにおいても、「綺譚」の影響を受けている。新垣の随筆の特色は、現在では落魄した街の隅々、滅び消えゆく遺跡の数々に、ロマンチックで悲哀を帯びた歴史、「綺譚」のいう「荒廃の美」を見出す点にある。一九三九年の「安平夜話」(『台湾時報』第二百三十八号、十月)は、「女誠扇綺譚」に誘われて、安平の「荒廃」した風景をめぐる、台南散歩の一篇である。「荒廃した安平風景が、何となくなつかしい」と、名物の果物の漬物「^{キヤムスイテン}塩酸甜」を味わいつつ、安平のあちこちを歩いて、怪物や大亀や石像の伝説を探る。「現実の安平は淋しく、さうして見えない風景が多い。けれども、その風景の彼方から不思議な怪物が泳いで来るのであり、又海をおぼつて渡つて来る国姓爺の海軍の軍船の幻が生まれて来る」というように、目の前の平凡な風景の隙間から、積み重なった歴史が、奇異なる幻の姿を見せることに、台南の魅力を発見する。

しかし新垣の「女誠扇綺譚」考証は、当初はモデルや作品に対する関心からなされたかもしれないが、少しずつその趣を変えていく。「女誠扇綺譚」と台南の町」一六(『台湾日報』一九四〇年四月二十七日-五月七日)では、「台湾的エキゾチックな文学の最高の華と咲いたものが「女誠扇綺譚」であり、又その情調をそのまゝ、たゞてゐるのが台南の町」だとしている。重点は作品から、現在自らの住む台南の街の考証に移りつつある。新垣は、「綺譚」考証を通して、台南がいかに隅々まで歴史の刻まれた街であるかを発見した。「この台南の街の何処かの隅に存在してゐる美しい文学的な風物や伝奇的な世界に対する親愛の気持〔以下、新聞製本箇所のため、読み取れず〕台南の町の小路を

歩いて世に知られない風物に接することの多いこの頃、私はこの町の有識者が今少しこの町を知つて欲しいと思ふことが多い」。新垣が、「この小説を読む人々が如何に安平や台南を愛するやうになるか」と語るのは、自らをも含んでいる。

こうして、「女誠扇綺譚」の痕跡を求めての散策は、やがて台南という街自体の研究へと発展していった。一九三九年発表の、台南時代の最初期のエッセイ、「安平夜話」（前掲）は、まだ「女誠扇綺譚」追跡の形をとっているが、一九四〇年の「初夏随想 花咲ける鳳凰木」（『台湾時報』第二百四十五号、一九四〇年五月）となると、台南の代表的な街路樹である鳳凰木がいかなる経緯をたどって台南に移植されたかの考証である。そして「雷神記 廟を調査して」一一十（『台湾日報』一九四〇年九月十一・十五／十七・二十日）は、台南の雷神を調査した研究となっており、以後、「台南通信」（『文芸台湾』第一卷第六号、一九四〇年十二月十日）「風獅仔覚え書 屋上の魔除け人形」一一三（『台湾日報』一九四一年四月十六・十八日）など、本格的な台南研究がつづく。いずれも実地調査にもとづき、詳細に台南の民俗を論じている。

いつしか台南の民俗研究に足を踏み入れたことについて、「台南通信」では以下のように記している。

一体私は土俗の研究をするつもりなどはないのだが、いつかこんなことに興味をもってしまった。しかしこれも台南のことに限してだけの興味なのである。台南を歴史の街だとよく人々が言つてゐるが、それはゼーランヂヤや赤嵌楼ばかりのもつありふれた歴史的な雰囲気だけではないのである。この台南の陋巷を歩いて行くと、何と無数の歴史にうち満ちてゐることだらう。汚い貧民窟のやうな中に施琅將軍の居宅があり、みすばらしい雑貨屋に入れば林朝英の位牌を守る子孫が住んでゐる。淋しい病院だと思つて入つて見ればその診察場の壁面に大きな義民碑の歌碑がはめ込みになつて残つてゐる。（中略）

私は常に新しい興味と喜びに打たれながら安平や台南の街を歩き廻つてゐる。かつて前嶋信次氏がこの街の歴史をいろ／＼と研究された事は有名であるが、今はそ

のあとを継ぐ人がゐない。先史研究家としての國分直一氏の真摯なアルバイトの数々は、多くの若い人々を刺戟して、この地方にかうした方面の成績は着々と挙りつゝあるが、この街の建物に文書に金石に記された郷土史的な方面の研究者は何故現れないのであらう。魚釣とカメラと囲碁とに暮すのも楽しみであるならば、この街をかういう風に愛して散策を楽しむ心は又類のないものである。

新垣の「台南徘徊」、及び延長線上での台南研究には、先達というべき人々がいた。台南に赴任した新垣を待ち受けていたのは、一九三〇年代に入って盛り上がっていた、台南の街や歴史を見つめなおす、台南再発見の動きだった。

新垣は回想録で、「当時、台南一高女には浜田隼雄、國分直一（二人とも台高の先輩）、台南一中には前島信次（台北帝大副手から転任）と私らが、『台南新報』の文化面の担当記者の岸東人氏の後援を得た教師として、それぞれ台湾風土の研究を発表し、名を知られるようになっていました」と語る（『華麗島歲月』¹⁴⁾）。新垣にとって濱田と國分は台北高校の先輩であり、前嶋は台北高校時代にフランス語を習った恩師であった。しかも前嶋は、歴史学の見地から都市台南を、國分は、考古民族学の立場から台南地方の研究を進めていた。濱田も含め、「これら諸氏が揃って台南地方を中心とした研究を発表され、私の文学活動もこれら皆さんから大きな感化と影響を受けることになりました」という（「『岸東人さん』追憶の記」¹⁵⁾）。彼らが台南研究を発表する場となったのが、『台湾時報』であり、『台湾日日新報』であり、そして何といても地元紙、『台南新報』が一九三七年に改称した、『台湾日報』だった。当時『台湾日報』の学芸欄を編集していたのは、岸東人（一八八九—一九四一年）で、地元の先輩らと肩を並べて、新垣も数々の随筆を発表したのは、岸の慫慂による¹⁶⁾。

14) 新垣『華麗島歲月』（前掲、五五頁）。

15) 新垣「『岸東人さん』追憶の記」（岸萬里編『鳳凰木の並木 岸東人遺稿集』岸洋人・美智子発行、二〇〇七年、三三頁）。

16) 新垣が台南時代の『台湾日報』に掲載した記事については、松尾直太氏の労作「『台湾日報』の「学芸欄」について 含『台湾日報』夕刊第四面主要執筆者別掲載目録」（『天理台湾学報』第十五号、二〇〇六年七月）に目録があり、参照させてい

新垣は地元の台湾人研究者とも、多くはないものの交流があった。台南の街の隅々をめぐりはじめた新垣の、台南理解の産婆役を果たしたのは、前嶋信次、國分直一の場合もそうであったように、台南の郷土史家、石暘睢（一八九八—一九六四年）であった。石は『民俗台湾』の創刊号（一九四一年七月）に「台南に於ける古廟の調度品」を発表していた郷土史家である。また同じく郷土史家の莊松林（一九一〇—七四年）とも交流があった。莊は石暘睢とともに、台南の古碑の全面的な調査を行い、「台南古碑記」を『民俗台湾』の第二卷第三号（一九四二年三月）に掲載した。莊の台南民俗研究では、國分や新垣らの成果が参照されている¹⁷⁾。

しかし残念ながら、文学の面では、台湾人作家たちとの交流はさほど見られなかった。当時新垣は、「台湾文学艸録（十九）」で、「台湾も過去の文学の發達の経路を整理しておかねばならない」と述べるように、台湾の過去の文学を総括する必要を感じていた。この時期、島田謹二が台湾における日本文学の痕跡をたどる作業を始めていた。新垣はその影響を台南にあって受けたのではないかと思われる。新垣の企図の実現の一つが、一九三八年の「台湾文学艸録」の連載であり、また「台南地方文学座談会」でも、台南を舞台とする文学に言及している。だがそこに、台湾人作家は出てこない。新垣の目に映るのは、内地人の文学ばかりで、その点は師の島田謹二と同じことだった。

台南に滞在してはいても、台湾人文学者たちとの接触は薄かったが、しかし新垣は台南研究に沈潜することで、台南を表象する際に絶対的な先行テキストだった「女誠扇綺譚」との、決別を意識するようになる。一九四〇年の『女誠扇綺譚 断想ひとつふたつ』（前掲）で、モデルや舞台の詮索をすることについて、「私ははじめのうちはその愚を愚と知らずに行つてゐた。しかし、今となつてはその愚かな行ひをもなつかしんでゐる——考へが變つたためかもし

ただいた。

- 17) 「莊松林先生台南專輯」（『文史薈刊』復刊第七輯、台南市文史協會、二〇〇五年六月）所収の「風獅爺」など。莊松林については、王美恵「莊松林の文学歷程」（『文史薈刊』復刊第八輯、二〇〇六年十二月）、莊永清「以文学介入社会 「台南芸術俱樂部」作家群初探」（『文史薈刊』復刊第十輯、二〇〇九年十二月）が詳しい。

れない」と記す。そして一九四三年の「台南地方文学座談会」では、「長らく台南に住んで、これを何度も読みかへしてゐるうちに、台南の文学はかうしたテーマを取扱ふだけでよいものかどうかと云ふことを痛切に感じ出して来た」と語る。自身の態度を、「女誠扇綺譚」の世界から、それを乗り越えて現実を取り上げようとした」とする。「土地の愛し方が、前の文学は古きものにあこがれて、作品もさうした匂ひが強かつた。これから現実に深く入つてゆく、それが妥当な方法だと思ひます」。

新垣がこのような文学観を大きく変えることになった理由は何だろうか。「綺譚」の流れを汲みつつ台南をロマンチックに描くことへの疑問を持たせたのは、毎日教壇で顔を合わせ、「綺譚」について語りかけた相手、台湾人子女たちをはじめとする、台南の台湾人たち、及び彼らの助けを借りつつ進めた台南研究だったのではないと思われる。台南は、台湾人が圧倒的多数を占める台湾随一の古都で、しかも新垣の勤務先の台南第二高等女学校は、台湾人子女のための学校である。のちの回想で、二高女の台湾人生徒をはじめとする台湾人との交流、そして台湾という土地の記憶を濃厚にとどめる台南という都市が、新垣の台湾に対する見方を変えたことを語っている（『華麗島歲月』¹⁸⁾）。

本島人生徒がほとんどの二高女での、つまり台南での生活は、私にとって一生忘れえぬ幸福な人生の時でありました。台湾っ子として生まれながら本当の台湾を知らぬ私が、目ざめたのは、土地の上流をはじめとして、すべての人達との交流から多くの事を得たことです。私の日本人としての二世意識が、無意識の「台湾人」に変わっていたわけです。

まず、台南の歴史研究の実態が深まりました。たとえば、日本人となっている本島人の真実は何であるか、その心情が私の身心にも滲み込んでしまったのです。

古都、台南は高雄に比べると古い支那風の建築に囲まれた町で、その中に内地人が居住している点が、高雄の風景とも異なっています。私は、多くの生徒への愛情とともに、台南市内や安平の町の人たちへ対して、深い愛着を持つようになり、あ

18) 新垣『華麗島歲月』（前掲、四五－六頁）。

ちこちの街巷を尋ね歩くことを喜びとする日々を送るようになりました。安平の町の赤嵌城趾や、台南市内の赤嵌楼に佇んでは、オランダ時代や鄭成功の史実が大きなロマンとなったものです。

生徒を中心とする台湾人との密な交流が、新垣に「湾生」であることの自覚をもたらした。こうした意図を宣言したのが、一九四一年の「第二世の文学」上下（『台湾日日新報』一九四一年六月十七／十九日）である。領台から四十七年が経過、新垣は「台湾も第二世の天下となつた」と語る。かつては台湾で生まれた子どもは「滑稽な位内地渡りの者から馬鹿にされ、可笑しな位同情された」。しかし今では、「中等教員の中堅どころに第二世が進出して、自分達の弟や妹を教へる親愛の情をもつて生徒を教へてゐる」。こうした第二世は、「もう台湾の土に根が下りてゐるのである。台湾の土地に深い血のつながりを感じてゐる」と語り、また本島人に対しても、子どものときから一緒に遊び学んでいるから、「最も理解し、最も愛する心が生れてゐる」。その欠点も美点もよく承知している、「同じ台湾で生れて育つた本島人とはやはり共通の事を感じる能力が出来てゐるから、凡て同感的同情的」である。

第二世は内地へ帰る必要はない。「台湾の事は台湾の子で！」「台湾にものを創り出すべきであり、それを育ててゆくべきだ」というのが新垣の意見である。

文学にしてもさうである。いつまでも望郷的なものはつまらない。勿論台湾をエキゾチックな眼で見えるのも一向珍しくなければ、それかと言つて、やたらに植民地内地人の生活暴露といふやうな妙に台湾を生の世界のやうに描くのもそろ／＼鼻について来た。もつと／＼台湾に根の下りた、台湾の土や草に寝そべつて鼻をくくんならしてその台湾の土や草の香をなつかしんでゐるやうな文学が出てよいと思ふ。しかしその文学を一体誰が生み出すべきだらうか。勿論、第二世でなければなるまい。第二世は頭が悪くてそれが書けないのか。ぼんやりしてしまつたのか。だがそこで第二世は又、思ふ、何だだまされてゐたぞ！渡り者めに！あれらが台湾を見てゐる眼鏡は少し台湾の暑さに参つて曇つてゐたんぢやないかな。一つおれ達

は一つこの台湾で生まれた自分の眼玉で何のケレンもない、さうしてたまらなくな
つかしい台湾を眺めてみようと。

台湾に対する自らの郷土としての関心や、「湾生」というアイデンティティの自覚は、新垣に限った話ではない。新垣の台北大の後輩、中村忠行も、新垣同様台湾生まれの湾生である。中村の生まれた新竹は州庁の所在地で、日本人の居住者が多く、日本人街が形成されていた。ただ、父親が役人をやめて事業をしていたため、家は台湾人の住宅地にあり、近くに関帝廟があって、よく公学校で遊んだ。しかし小学六年生で台北に移ると、居住地は日本人と台湾人ではっきり区別されていた。台湾人の多く住む万華や大稲埕は無縁の地で、中高と教育が進むにつれ、「中国的な文化との接触」は少なくなる一方だった。それが、中国文学専攻の友人が、台湾人の家を借りて中国風な生活を始めたり、『台大文学』の印刷所が大稲埕にあったことから、大稲埕の裏街を歩くようになった。やがて「歌仔」の収集を始める。「この頃、台湾育ちの我々の間に、新しい台湾研究の声が挙ってゐた」¹⁹⁾のである。

同じことは、池田敏雄（一九一六―八一年）についても当てはまる。池田は、新垣が一九四〇年から本格的に開始した民俗研究について、わざわざ、「新垣宏一氏の台南に於ける民間伝承採取報告は、甚だ意義のあることであつた」と言及している（「昭和十五年度の台湾文壇を顧みて」『台湾芸術』第一卷第九号、一九四〇年十二月）。池田は島根生まれだが、十歳になる前に渡台、台北第一師範学校卒業後、龍山公学校の教員として、台湾人の子どもたちを教えていた。一九三九年に民俗研究を開始、台北の民俗に関する研究を続々と発表する。教え子黄氏鳳姿を通して民俗理解を深めた点も、新垣と重なる。

新垣は一九一三年、中村は一五年、池田は一六年の生まれで、一九四〇年前後、二十代の半ばから後半である。選択肢として将来の内地移住がないわけではないが、少なくとも彼らの故郷は台湾で、いずれは日本に「帰る」という感覚はなかっただろう。日本による領有から四十年以上が経過、日本人と台湾人

19) 中村忠行「書かでの記」（『山辺道』第二〇号、一九七六年三月）。

の間には言語や民族や習慣や居住地のみならず、新たに階層の差も発生し、依然大きく壁があった。とはいえ、若い世代の台湾人が、望むと望まぬとにかかわらず、日本語を人生の一部として受け入れるように、台湾の若い日本人も、台湾という土地を受け入れるようになっていた。新垣の場合、台南で台湾人子女を相手とする教員をし、台南研究に没頭したことで、それまで見えてはいても意識していなかった台湾人の世界が、目の前に開けてきたのである。

三 台湾人を描く——「本島人の真実」

新垣宏一が台南を舞台とした最初の小説を書くのは、一九四二年四月のことで、約四年間の台南在住を経て台北に移動してから、すでに一年近くが経過している。なぜ新垣は、台南を離れてから、台南の人々を描く小説を書くようになったのだろうか。

きっかけの一つと考えられるのは、新垣「台南通信」と同号の『文芸台湾』に掲載された、西川満「赤嵌記」（『文芸台湾』一九四〇年十二月）の刺激である。早稲田大学仏文を卒業して一九三三年に帰台した西川は、『台湾日日新報』の学芸欄を担当、さらに媽祖書房を設立して雑誌『媽祖』などを発行するなど、独自の文学活動を開始した。その西川が「赤嵌記」では、「女誠扇綺譚」の向こうを張って、台南という街から立ち昇る歴史のロマンを描いた。そもそも西川を一九四〇年一月に台南へと招いたのは、新垣であった。その西川が、台南の街を一瞥しただけで、新垣が随筆や考証の形で表現していた台南という都市の魅力を、鮮やかに小説の形で描いてみせた。同じ号に掲載された自身の区々たる随筆と、西川の堂々たる小説を見て、内心忸怩たるものがなかったとはいえないだろう。

西川の「赤嵌記」が出てすぐ、新垣は「昭和十五年度の台湾文壇を顧みて」で、『文芸台湾』掲載作品の中で主要なものとして、濱田隼雄の「横丁之図」と西川の「赤嵌記」を挙げ、「私の好みから言へば「赤嵌記」の方が好き」と記している。だが、新垣は同時に「赤嵌記」に対し、「綺譚」に抱くようになって

ていた疑問や不満も感じたのではないかと思われる。「赤嵌記」は「綺譚」の衣鉢を継ぎ、台南をロマン溢れる幻想的な街として描く。「綺譚」に対する、「かうしたテーマを取扱ふだけでよいものかどうか」という疑問、「土地の愛し方が、前の文学は古きものにあこがれて、作品もさうした匂ひが強かつた」という不満（「台南地方文学座談会」）は、「赤嵌記」にも当てはまる。

新垣が「綺譚」と異なる創作の方向を探るようになったきっかけには、もう一つの作品との出会いも考えられる。庄司総一『陳夫人』の出現である。『陳夫人』の第一部「夫婦」は一九四〇年十一月三十日に通文閣から刊行され、第二部「親子」は四二年七月に刊行された。第一部の刊行は「赤嵌記」とほぼ同時である。刊行後、新潮社第三回文芸賞候補となり、翌年四月には文学座で舞台化された。四三年九月には、第一回大東亜文学賞の受賞作の一つとなった。

『陳夫人』は、同じく台南を描きながら、「女誠扇綺譚」や「赤嵌記」とは大きく異なるスタイルの小説である。古都台南の富豪の旧家を舞台に、長男の内地留学経験者陳清文と、妻の内地人泰子を主役として、大家族の伝統的な生活や習慣を描いた『陳夫人』は、台湾在住の作家たちに大きな衝撃を与えた。中でも、台南に住んで台湾人の生活に注目するようになり、地味に民俗の研究に打ち込んでいた新垣にとって、台南どころか台湾文壇の外から、台南の習俗を描いた『陳夫人』が突然現れたことは、大きな驚きだったろう。回想で、「私は佐藤春夫の作品に心酔して、『陳夫人』の舞台に生きました」と語るように、『陳夫人』は「女誠扇綺譚」につづく影響の源泉だった²⁰⁾。

このように「赤嵌記」と『陳夫人』から、異なる刺激を受けて、一九四二年発表の「盛り場にて」（『文芸台湾』第四巻第一号、一九四二年四月二十日）以降、台湾人を描いた小説を発表する。その作品は、一、台南の女子生徒を含む、台湾人描いたもの（「盛り場にて」「城門」「訂盟」「砂塵」「船渠」）、二、台湾に居住する内地人を描いたもの（「山の火」）、三、自身の生活に取材したと思われる身辺小説（「陀仏靈多」「いとなみ」）に分けられるが、数が多いのは台湾人を描いた小説である。

20) 新垣『華麗島歳月』（前掲、五五頁）。拙稿「庄司総一『陳夫人』に至る道」を参照。

ではこれらの作品には、新垣が「二世の文学」で目指すと宣言したような、「台湾に根づいた文学」が見られるだろうか。先行研究では、新垣の小説は決して高く評価されてはいない。その評価をごく簡単にまとめれば、新垣の作品には植民地支配に対する批判的検討が見られず、日本人教師の立場から台湾人を見る独善性があり、支配者である日本人として被支配者の台湾人を語る枠から、決して外れることがない、つまり、新垣の小説に批評性はない、とされてきた²¹⁾。

だが新垣の作品には、本当に、植民地支配の現実に触れた箇所はないのだろうか。台南で毎日台湾人の学生に接し、台南の民俗研究に没頭した経験は、その作品には一向に生かされず、「支配者側の尖兵」（奥出）、「指導者としての立場」（井手）に終始しているのだろうか。

新垣がもっとも愛好した台南文学「女誠扇綺譚」も、作品の表面には、植民地支配に対する批評はない。だが作品を詳細に分析すると、そこに意図したかどうかはともかく、批評性が浮かび上がる。河野龍也は「綺譚」の語りの特徴を詳細に論じ、「支配者の表象体系が「植民地台湾」の現実に触れて崩壊し、語りそのものが無効化して行くプロセスを示唆するメタ性」があるとする。「綺譚」の語り手である日本人の記者「私」は、植民地の現実に関心であることで、従来のアイデンティティを確保しようとしていたが、作中に描かれた、下婢の恋人と下婢自身の自殺事件に関わることで、現実に関わり、「支配者の立場から植民地について語ることの決定的な無力さと限界を探り当て」てしまう。この戦略的な語り、「表象行為が無効化するその臨界点においてこそ、他者のリアリティが把握される」という語りに、河野は「綺譚」の「批評的価値」を求めている²²⁾。

新垣の作品も、少なくとも作品の表面には、植民地支配に対する疑問などは

21) 奥出健「『文芸台湾』の成立と三人の日本人作家」（前掲）、井手勇「戦時下の在台日本人作家と『皇民文学』」（前掲）、和泉司「新垣宏一「砂塵」論」（前掲）。

22) 河野龍也「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論 或る〈下婢〉の死まで」（『日本近代文学』第七十五号、二〇〇六年十一月）。

呈されていない。しかし仔細に読み進めると、新垣の作品においても、本来他者であるはずの台湾人は充分分かりやすく描けてしまい、他者とはなっていない、というわけでは必ずしもない。

女子生徒が教師に出した手紙の形式をとる「城門」（西川満編『台湾文学集』大阪屋号書店、一九四二年八月十五日）を見てみよう。語り手の女子生徒「私」は、以前台南の女学校で「先生」に教わり、現在では台北の「高等家政院」という専門学校で学んでいる。一方「先生」も、現在は台北に移っている。夏休みに台南へ帰省した際に、「私」の祖父が死去した。先生は台南の「私」へお悔みの手紙を送る。この手紙に対して書かれた、台南に滞在中の「私」からの返事の手紙、という設定がこの作品である。

「私」は公学校ではなく小学校を出たため、台湾語をうまく話せない。しかし、台湾語しか話せない祖父の語ことは「不思議によくわか」った、と亡き祖父への思慕を語る。日常台湾服を着ていた祖父は、完全に台湾式の生活を送っていたが、葬式だけは「日本式に火葬」にしてほしいと希望した。「私」の忖度によれば、孫の自分から新しい時代の話聞くうちに「これといふ深い感動や感激によつたわけではなく、いつの間にか日本式な葬式によって葬はれたものだ、と思ふやうになつたのでないか」、あるいは「私達に台湾式のあの異様な葬式を見せたくないといふ心やりがあつたのではないか」という。いずれにせよ、国語を話せず、和服を着たこともない人であったが、「やはり祖父はよい日本人であつた」と結論する。

一方、父に対しては、「私」は反感を隠さない。大学まで出た父が、台湾の伝統的な大家族の習慣として第二夫人を持つというのではなく、内地人が妾を囲うように、「母が嫁に来るとき一緒に連れてきた」「無知な女中風情」を、正妻つまり「私」の母よりも愛し、子どもを三人ももうけた。独立して生活できるだけの職業をつけさせるため、「私」を東京に留学させたいと考える母に対し、台北の「花嫁学校」のような教育しかない高等家政院へ行かせようとする父。だが、「従来の台湾の家庭のこの悲劇」をくり返す父も、実は市議員として「皇民鍊成運動」に熱心で、娘に国語生活を送らせるため小学校に行か

せる人物でもある。

このように見てくれば、台湾の習慣から抜け出せなくとも、最終的に日本式の葬式を選択する「よい日本人」である祖父や、同じく台湾の家庭における悲劇をくり返しつつも、「皇民鍊成」に邁進する父は、一見、先生をはじめとする日本人や、日本人たらしとする「私」をおびやかす存在ではない。

しかし作品には、こうした単純化した人物像を拒むノイズが、随所に配置されている。まず祖父については、そもそも、「よい日本人」でありたいという理由から日本式の葬式を望んだかどうかは分からない。「私」が、「祖父が何故日本式の葬式を望んだかといふ気持は誰も別に聞いた者がないのでわからない」と明言するように、その動機は閉ざされている。衣服も言葉も変える必要を認めなかった祖父は、強いていえば、日本人であることに邁進する「私」が、台湾式の葬儀を毛嫌いすることに気を遣ったのかもしれない、というのが、説明ともいえない説明である。

父が単純に皇民鍊成に邁進する人物でないことははっきりしている。祖父が火葬に付された原因について、「父が常に皇民鍊成にやかましい市議員だものだから自分の地位と社会的な評判を考へて火葬をするやうにした」と陰口を叩かれたように、父は利にさとく、皇民鍊成も利を考えてのものだと周りから見抜かれている。台北の整備された城門に小便をする人がいると聞いて、大笑いし、台南の城門など懐古的なばかりで保存の必要もないから、取り壊して公共便所にすればいい、と言い出すような、極めて現実的な考え方の持ち主である。その一方で、内地の妾と同じように第二夫人を囲うなど、日本人であることに反すると見なされない形で、台湾の習慣を巧妙に残している。娘を小学校にやったのも、日本語を使える有利さを見すえてのことではないかと考えられるし、また娘に独立できる職を身につけるため東京へやろうとしないのも、東京で自由恋愛などされたらたまったものではなく、うがっていえば娘の結婚を自らの政略の手段に残しておこうと考えたものとも考えられる。純粹に生きようとする「私」には、「嘘のかたまりに見えてたまらない」父は、日本統治下にあって面従腹背しつつ図太く生き抜く、台湾人の逞しさを体現している。

「私」は父の妾を見下し、その子どもたちが弟妹として養われることを不愉快に思い、父に対し嫌悪感を隠さない。にもかかわらず、妾を母より愛する父が、「それでも私や弟を可愛がるのには少しも変りません」と認めざるをえない。「私は父の地位と名声を思ふとき、その生活を私はもつともつと低い階級の教育を受けなかつた青年が志願兵を血書してまで願ひ出るまごころと比べて」いるが、被支配者の立場からすれば、「志願兵」を願ひ出ることは、支配者の思うつぽである。父のような生き方こそ、支配される側の無言の抵抗を示しており、それがこの小説には書き込まれている。

このような単純化を拒む人物像は、一見純粹に日本人となるよう心掛けている語り手の「私」についても、同様である。台湾式の葬儀を嫌い、台湾の伝統的な蓄妾制度を憎むが、一方で日本人を目指すことへの強い葛藤を抱えていることも、何度も記されている。小学校を出たおかげで国語が達者で、台湾人生徒が多数の女学校では優越感を感じ、「私は自分の家の地位といひ生活といひ真に皇民的な生活の楽しみといふものを感じてゐた」。しかしその一方で、「小学校時代は決して楽しい生活ばかりではありませんでした」、「私は自分の成長と共に色々なめにあつて色々と考えることがありました。私は台湾語が話せないのです」といったことから、意図的に「生活のすべてが内地化した形式を整へ」るようにしてきた。ところが、四年生になって内地に修学旅行で行き、あこがれの東京駅で、出迎えにきた留学生夫婦が、「あたりをはばかり風」もなく台湾語で話しているのを聞き、強いショックを受ける。

東京駅頭の第一の驚きをはじめとして、もつともつと数多くのことを見ました私は、台湾にゐた私達の生活について今までにないことを感じたのでした。さうしてその事は一つの疑問となり、それが何かしら心の奥底のつかえとなつて、どうにもならなくなつて、しまひにこの旅行が不愉快になり自分ながら驚くばかりヒステリックに痼癪を起すやうになつて、帰りの船中ではまるで不逞な自分の心に苦しむやうになりました。それがとうとう先生の前で破裂してしまひました。(中略)東京で先づ留学生の台湾語を聞き、街で半島の人々が朝鮮服を着て平気で歩いてゐる様

子などを私ははじめの内は奇異の眼で見えてゐました。私達は今まで絶対に国語で話し合ふやうに学校でもしつけられ、服装にしても台湾服を着用しないやうに、出来れば和服を着るやうにと言はれてゐましたのに東京に来てみますと、この現状です。私はその内にその先輩の方達にもあつて東京の話を書きました。ところが皆東京は自由でのびのびしてゐて、他人の生活などにうるさく干渉などしないよいところだつて、さも何だか私達お上りさん組をあはれむと言つた顔付なのです。(中略)かうしたことが私にわけのわからない怒となつて胸に鬱々としたものになつて行つたのでした。

必死になって日本語を身につけ、日本人として身だしなみを整え、首都に出ても恥ずかしくない立派な日本人でありたいと志していた、台湾での辛い日々は、何だったのか。ここには「日本人になること」が、台湾でのみ極端に強制されていることが明かされている。また、東京に出た台湾人留学生たちのしたたかさも、彼らとわずかに接触しただけで目ざめてしまう、「私」の「不逞」な心も。この苦悩は、王昶雄（一九一五―二〇〇〇年）が『奔流』（『台湾文学』一九四三年七月）で、日本人になろうと苦闘する伊東に託して描いた苦しみに通じる²³⁾。このように見てくれば、「城門」には台湾人の現実も、日本が去れば、台湾人にとって都合のいい部分をのぞき、きれいに拭い去られるだろう、押しつけられた皇民化の現実も、はっきりと記されている。

しかもそのことに、「私」が語りかける相手である「先生」も、気づいている。東京駅で卒業生たちが台湾語を話している傍で、「私」は「先生の顔色をぬすみ見」る。先生は「只一人静かにこの台湾語を聞きながらお歩きなつてゐる」。そして、「その台湾語のお喋りを何かかういたいたしい気持ちで聞いていらつしやるやうに見えました」。この「いたいたしい気持ち」は、台湾語で会話する、出迎えの卒業生と角帽を被ったその夫君にだけ、向けられているとは思われぬ。彼らは「大きな声で別にあたりをはばかりる風も見えない」、つまりまっ

23) 拙稿「王昶雄」(『文学で考える〈仕事〉の百年』双文社出版、二〇一〇年、一一四―五頁)。

多くの自然体なのだから、東京にあって日本語を話さない点で、教師から同情されるいわれはない。教師が「いたいたい気持ち」でいるとすれば、それは自身が熱意をもって当たった国語教育が、教え子の卒業後の私生活に何ほどの爪痕も残していない事実に対して、ではないだろうか。

それだけではない、ショックを受けた「私」が、「自棄的」な言葉を先生に投げかけたとき、「先生は涙を浮べて熱心に私の不心得をお悟し下さいました。先生は私一人の危機を救はうとしたのではなく、私を通して何人かの立派な皇民を生み出さうと戦はれた」。生徒の不心得を説教するためだけに、教員は涙を浮かべて、一時間も熱心に生徒に語りつづけるものだろうか。「台湾をもつともつと引き上げやうとするなら台湾の中に生きて台湾と共に成長すべきだ」と語る先生は、台湾のためにいくら皇民化教育を推進しても、必ずしも生徒の心の奥底まで根付くわけではなく、また真面目に皇民化を受け入れる生徒ほど、狭間にあって苦しむことに、思い至っている。また、教員の説教の半分は、必ずしも成功しているわけではない皇民化教育、それが結果として生徒を苦しめていることに気付いている、矛盾した自身に対しても、向けられているのではないのか。

「先生」は「本島人の旧慣と因習」、「台湾の歴史や民族」を「研究」している。「台湾の本島人の間では先生の御研究に好意をもつてゐる方も大変多い」と、元教え子から褒められるほどである。そんな先生は、知れば知るほど、皇民化の矛盾に気づかずにいられない。明確に批評的な意図があるわけではない、限られた数ではあっても生身の台湾人に触れ、台湾の現実に入り入ろうとしたとき、その作品には「本島人の真実」が入りこんで来る。「城門」には、台湾人子弟との交流や台南研究の結果、意図の有無は関係なしに、台湾における支配と被支配の構造が書き込まれる。それは、たとえ意図的な批評意識が低くとも、台湾を知ることがもたらした結果なのである。

同じことは「城門」以外の作品についてもいえる。同じく女生徒を描いた「砂塵」（『文芸台湾』終刊号、一九四四年一月一日）は、野沢という高等女学校の教師が、父親の借金のため学業をつづけるのが困難になったと訴える女生

徒のために、家庭訪問し対策を考える、という話である。教育を通して、生徒のみならず家庭にまで皇民錬成を及ぼそうと尽力する教師、という観点から捉えると、皇民化文学の一つであり、和泉氏の分析の通り、野沢が微温的な解決を図る、「自己満足」の要素の強い人物である点も間違いない。野沢の視点には植民地支配への疑問などは一切含まれない。

しかしこの作品には、単なる支配者側の独りよがりだけが描かれているわけではない。そもそも「砂塵」は、「女誠扇綺譚」の自殺する下婢を、二十年後の現在に置き直し、自殺ではなく主体的な生き方を模索したらどうなるか、という想定作品である。「砂塵」の冒頭、野沢は授業中「綺譚」について、中でもその終結に、「幼くして孤児となり隣人である穀商の黄家に拾はれて養育され」た、「哀れな下婢が自殺」するくだりを、女生徒たちに語る。多くの場合、小さいときに金で買われて下女とされるのであり、一種の人身売買と呼ぶべき「陋習」について、野沢が語った生徒の中に、宝玉はいた。豊かな家庭の出身者が多い中で、宝玉は伝統的な傘職人の家に生まれた貧しい娘で、クラスでも最優秀だが、性格は「陰気」で友だちもいない。その宝玉が次の章で、野沢の家まで、父親の借金で売り飛ばされるかもしれない、と相談に来る。もともと陰気とはいえ、授業中、「いつものやうに一向にうかぬ顔」だったのは、「綺譚」の下婢と同じ境遇に陥るやもしれぬわが身を考えていたとすれば、無理もない。

では宝玉は、「綺譚」の下婢のごとく、主人から内地人に嫁することを命ぜられたゆえに、絶望し首をくくった恋人の後を追って、自らも自殺するような、受け身の存在であろうか。窮地に陥った宝玉が野沢に相談に来たのは、担任というだけでなく、野沢の話を聞いて、野沢には理解があると見込んだからだと思われる。さもないと、内地人の男性教師、しかもろくに口をきいたこともなく、自らに好意的とも思えない教師の家を、わざわざ訪ねたりしないだろう。教師が何らかの対応をすることを予期して、意図的に野沢を選んでいるのである。

実際野沢は、宝玉の家庭を訪れ、母親に説教し、借金のある叔母宅にも出向

く決意をし、宝玉が卒業まで学校をつづけられるよう対応する。また、将来についても、宝玉の能力にふさわしい、国民学校の教師という仕事を世話しようと決意する。たとえそれが野沢の自己満足であろうと、宝玉にとっては、父の借金ゆえに、学業ではるかに劣るが豊かな級友たちのごとき令嬢たちの召使いとなり、能力を生かすこともなく、場合によっては奉公先の思うままに結婚先を決められ、「綺譚」の下婢のように自ら命を絶つことになるかもしれない運命を切り抜けるには、有効な方法である。

そもそも宝玉は、野沢なら生徒のために奔走するだろうことを事前に承知している。野沢は教室で、「風俗習慣の異つた生活に帰つて行くか、新しい皇民生活に突進すべきか」という観点からこの台湾の伝統的な習慣について語っている。自らが陥った危機について、この教師に話せば、たとえ「皇民錬成」を説く建前からであろうと、「自己満足」であろうと、何らかの対応を講じるであろうことは、十代半ばではあっても、世間の冷たさを知る頭脳すぐれた少女であれば、充分予想できる。成績はクラスでトップを競うも、家庭が貧しく裕福な旧友たちとなじめず、しかも父の借金で追い詰められた女生徒にとって、「宝玉が下女になるか芸姐にでもされるか、これは学校にとつても悲劇」と考える教師の援助は、偽善であっても一縷の希望である。日本人になれと強制する皇民化運動は、台湾人にとっては耐え難いものであった。しかし表立って反抗することは困難だった。そういうとき、「城門」の少女の父や、「砂塵」の宝玉は、皇民化の建前を利用するしたたかさを習得している。

新垣がいったんは「女誠扇綺譚」に陶醉したものの、台南体験を通して、「綺譚」に不満を抱き、自らの文学世界を模索するようになったことはすでに見た。「綺譚」の少女は、内地人の私に姿を見せることはない。「綺譚」の末尾は、「私がその声だけは二度も聞きながら、姿は終に一瞥することも出来なかつたあの少女は、事実には、自分の幻想の人物と大変違つたもののように私は今は感ずる」と結ばれる。一方、「綺譚」を念頭に置いて書かれた「城門」では、「陰気」で「無口」な、教師の家を訪ねても「何か言はうとするらしく唇をひくひくと痙攣させたが、声を出し得ないでやはりうつ向いたまま」の少女が、自ら

の苦境を訴え、そこから脱出を図る。視点人物である野沢の語りが、一方的に作品を支配してはいるが、作品の随所には、少女が自らの生き方を選択しようとする意志が描きこまれている。ただし「砂塵」は、貧しい台湾人少女の強い生き方を描こうとした作品だというわけではない。台湾人の生き方に触れた新垣が、彼らを題材にしたとき、その作品に彼らのしたたかさが必然的に流れ込んだ、ということである。

もう一つ、台湾人を描いた作品を最後に見てみよう。「船渠」(『台湾芸文』第一巻第五号、一九四四年十一月十日)は、タイトルに「情報課委嘱作品」とされているように、新垣が依頼を受け、基隆のドックで取材の上で書かれた小説である。しかし実際には、戦意高揚の意図を読み取りにくい作品となっている。ドックで働く台湾人の工員が、隣の造船会社の高賃金に惹かれて、集団でそちらに異動するが、のちに一人前に育ててもらった恩義を思い起こし、元のドックに戻り忠義を尽くす、というのが筋で、これだけ見ると、日本人にとってありがたい話である。しかし台湾人労働者が、自らを育ててくれた日本人上司のいる会社を集団でサボタージュし、他に走る、という部分を取り出すと、穏やかではない話となる。決戦の年を迎え、ドックも戦場となる。しかも場所は台湾、「我が台湾が大輸送陣の大動脈であることは地図を見れば赤ん坊でもわかること」で、「台湾は日本の喉」であり、「この喉を一握にしたいのが敵の考へるところ」、「敵が必ずこの喉元に匕首をかざして迫つて来るのは火を見るよりも明らかな」である。

ところが、会社の日本人上司に、台湾人工員を操る手段として残されているのは、心細いことに、大声を出して威嚇するだけである。上司の矢矧は、「剣道で腕をきたへてはゐるが、しかし決して手荒いことをしないのが矢矧の特徴である。たゞこの声が猛烈なのだ。つべこべ理くつはいはぬが、この雷が落ちたら少年たちは慄へ上がつてしまふ」。実際どやしつけられた台湾人の少年機械工は、ベソをかいて詫げる。

米軍の上陸を機に、台湾の人々が、日本による統治に抗して立ち上がったとして、日本人が大声を出せば、すぐさま縮み上がって、服従してくれるものだ

ろうか。「矢矧さんが俺達の養成所時代からどんなに熱心に教へて下さったか」を思い出し、「賃金なんか問題ぢやない」と、恩義を忘れず苦難をともにしてくれるだろうか。そもそもこの段階でも、「もう皆本気になってゐるんだよその人達は。国のため、いや天皇陛下の御為に働くのだ。皆さう考へてゐるんだ。皆がさうでなくてはならんのにさ。未だ未だ分らぬ者がゐるの全くいやな事だよ」と嘆くほどである。未開だった台湾を植民地とし、台湾人を一人前に育てあげたのだから、いざ戦争の際にも日本人に尽くせ、というあまりに見え透いた筋書きは、それがいかに脆い期待かを、逆に明らかにしている。

おわりに——台南を通して台湾・台湾人を知る

新垣は後年、自身の作品について、次のように語っている（『華麗島歲月』²⁴⁾）

「文芸台湾」から分かれた彼等〔＝西川満や池田敏雄〕の風潮は私にも刺激を与え、私の詩風にも変化をもたらしたことは事実です。しかし、西川の浪漫手法や、池田の民俗世界の反応とは、私のそれとも似ていながら全く同じではなく、私の世界はその根底の実態が違っています。（中略）皇民化は台湾人を日本人に変えようとする政治教化体制であつたと想像します。そして、それはある程度成功したと思いますが、台湾で生まれ育つた内地人、ことに私のような本島人教育に生きた存在には、本島人側では内地人化するつもりであつたのが、内地人少年が無意識のうちに台湾人化していったのではないかと、今日になって思うのです。私の作品『城門』『盛り場にて』『砂塵』などの台湾風景は、単に「皇民化」を主題としているものではないと思います。成長した台湾二世の心情的台湾化の生んだものです。

新垣が小説を書き出すのは、一九四二年からである。新垣が書き出したころには、前年十二月に太平洋戦争が始まり、文学の表現は強い制限を受けていた。そんな状況にあつて、小説を書きつづけたいと考える、しかも可能な限りで自

24) 新垣『華麗島歲月』（前掲、五六―七頁）。

身の良心に恥じない表現をしたいと考える作家に残された選択肢は、さほど多くない。当局からにらまれないためには、時局に沿った作品を記し、自身の表現が国策にかなうものと証明する必要がある。時局から離れすぎることはできず、しかし無用なものを書くこと自体が害悪視される恐れがある。平野謙は『昭和文学史』で、「戦時中の芸術的抵抗」の作品は三種に大別できるとし、私小説、歴史小説、風俗小説を挙げている。中でも風俗小説として、一九三八年に書かれた宇野浩二「器用貧乏」（『文藝春秋』六月）、一九四〇年の広津和郎「巷の歴史」（『改造』一月）、織田作之助「夫婦善哉」（『海風』四月）、野口富士男「風の系譜」（『文学者』四－六月）を挙げている。一九四一年の舟橋聖一「悉皆屋康吉」（『公論』四月－）も加えられるだろう。平野はこれらの作品に、「是非善悪をおもてにあらわさぬ観照のリアリズムに沈潜したことのうちに、時代に対する腰を落とした抵抗」を見出している²⁵⁾。これらの庶民の哀歓を描く風俗小説は、時に作品の中に時局に媚びたポーズを入れつつも、客観的な作風で時代を描いている。

新垣も、太平洋戦争中、台南の人々、中でも、台湾人の浮浪児、女子生徒、若い知識人青年、ドックで働く職工、そして山で採籐業をしている内地からの移民、そこで雇われている原住民を描いた。彼らの生活、中でも台湾人の風俗を客観的に描くという点で、まさに風俗小説である。また自身の狭い生活に取材した私小説も書いている。これらの作品が、同じく異民族を描いた太宰治『惜別』（朝日新聞社、一九四五年九月）と同じような微温的な「自己満足」を感じさせることは間違いない。そもそも新垣の台南研究自体、極めて「自己満足」的なものだった。もし新垣の文学活動が、一九四〇年代前半という、極めて不自由な時代でなかったとしても、その筆はより直接に台湾の置かれた現実に向かっただろうか。たとえ「二世」の意識が濃厚でも、台湾の自治や独立に共感するような立場へと至っただろうか。そう思わせるには、新垣の作品から聞きとれるノイズはあまりに微弱にしか響かない。

だが新垣の創作が、困難な時代の中であって、一つだけの声に収斂されるよ

25) 平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、一九六三年、二四〇頁）。

うな台湾しか描いていないわけではなく、そこにはより多くの声がしのび込んで、かすかながらも複雑な響きを立てており、またそこに至る必然性为新垣の経験にある点も、本稿で論じてきた通りである。台南で台湾人の間に暮らした新垣が、意図してではなくとも、日本人に対し台湾人という二分法でのみ創作することを拒否するに至ったことは、十分に考えられる。台南における日本語を用いた散文文学の蓄積は、「女誠扇綺譚」から数えてすでに二十年を数える。日本語による台南文学の、日本人作家による最終走者というべき新垣の文学に、台南という街がもたらしたものとすれば、日本人であることと台湾人であること、植民地の支配者であることと被支配者であることが対立しつつも、その二分法だけで描くことができない世界が目の前に広がっていることを、作品において表現せしめたことではないだろうか。

- * 日本語文献は引用に際し旧漢字を新漢字に改め、ルビは省略した。中国語文献の引用はすべて拙訳による。
- * 本稿は、平成25年度科学研究費補助金若手研究（B）「台南文学の研究－日本統治下の日本語文学を中心に」（課題番号23720190）による研究成果の一部である。